國際會議情報

第三十四回ICANASについて

二階堂　善弘
森　由利亞
デレアヌ　フロリン

はじめに

第三十四回ICANAS（國際アジア・北アフリカ研究會議）は、大陸への返還を數年後に控えた香港にて、一九九三年八月二十二日から二十八日まで、ほぼ一週間の日程を費やして行われた。前回のトロントにおける狀況については、谷中信一先生に詳細なご報告があるので（『東洋の思想と宗教』第八號、一九九一年）、參照いただきたい。

ここで少しICANAS（International Congress of Asian and North African Studies）についてふれたい。その第一回は一八七三年パリにて「International Congress of Orientalists」として開催され、翌年ロンドンにて行われた後は、やや不定期とはいえ昨今は四年毎に世界各國で催されることとなった。なお、三十一回は一九八三年東京と京都で開催、一九八六年はハンブルクにて、一九九〇年はトロントで擧行された。次回はハンガリーのブダペストにて開催される豫定である。

第三十四回の運營は主に香港大學が中心となって行われた。但し香港大學は交通がやや不便であるため、香港島の中心部である灣仔（ワンチャイ）の、香港藝術學院・香港藝術中心・香港YMCAの三カ所を會場として使用し、研究發表が行われることとなった。

發表規模の大なることは、それまでも耳にしていたのであるが、現實の狀況は想像を超えるものであった。今回の發表

（二階堂）

一　發表について（一）―道教・中国古典小説

今回のＩＣＡＮＡＳにおいては、多くのパネルが同時に進行しており、全容を把握することは不可能であったと思われる。しかも聞きたい發表は重なることが多く、さらに事前に通告なしで時間が變更される發表もあり、結果として、三カ所の會場をかけずり回ることになった。にもかかわらず、實際に見聞できた發表は少ないものであったろう。以下には、筆者自身の關係する道教及び中國古典小説など、實際に見たものについて、發表題目を記す。（敬稱畧）

・道教

王賓「多種文化視野中的道―釋道與跨文化溝通」、鄭志明「山海經的神話思惟」、黄兆漢・鄭煒明「香港的道教」（以上、パネル２２３・道教と中國文化）。

羅秉祥「儒釋道三教看宋代之性道德觀念」、丁煌「唐代皇族入道原因幾個類型的分析兼論其影響」、黄兆漢「元代之武當道士張守清」（以上、パネル２４６・道教史）。

卿希泰「道教在中國傳統文化中的地位」、Evgeny A. Tor-

数は、パネルの數は四〇一に及び、各パネルに少なくとも三名以上の發表者があることから、豫定では一二〇〇を超える發表が行われることになっていたものである。さらに參加者は二千名を超えるものと思われた。但し、實際には發表者が突然參加できなくなったり、また會場に現れなかったりなど、キャンセルになった發表も多く、實數ではかなりこれを下回るものと推察される。その點について當局の運營の不手際を非難する聲もあった。しかし、それにしても世界最大規模の學會であることは間違いない。

第三十四回の特色は、香港における開催ということから、大陸・臺灣・香港の學者の參加が多かったということが擧げられるであろう。筆者が見聞したパネルなどにおいては、英語よりもむしろ普通話（中國語）が、討論の共通語として使用されることが多く、「中國國內學會のようだ」との評が聞こえたほどである。特に中國文學に關係するパネルでは、歐米・日本の學者も普通話で討論に參加する場合が多かった。このことは、筆者にとってはありがたかった半面、今回の會合は本來の國際學會とは異なった特殊なものではないか、との危惧も感じさせるものでもあった。だが、使用言語や運營方法など、開催地の特色が會議に反映するようなことは、これからも起こりうるであろう。

tchinov, *Mawangtui Texts and the problem of Reconstruction of Early Taoist Beliefs*, Yu Minggguang「中國道家文獻的新發現與中國歷史上的黃老思想」（以上、パネル３４３・道教と中國思想Ⅱ）。

John Lagerwey, *Taoist Ritual Space and Dynastic Legitmacy*, 鄭天皇「國內近期道教研究概況」（以上、パネル３６９・道教儀禮と習俗、なおこの部會には李豊楙氏も發表の豫定であったが缺席した）。

黃海德「中國西部古代道教石刻造像研究」、丸山宏、*A Study of Dao-zang Mi-yao* 道藏祕要、Knut Walf, *Working on a Western Bibliography of Taoist Literature — Experiences and Results*,（以上、パネル３９３・道教の圖像及び文獻について）。

・佛教

福井文雅 "Praises of Incense, "Xiangzang" 香讚, of Chinese Buddhism: Ritual Differentia between China and Japan"（パネル３３６・東アジアの佛教Ⅲ）。

・中國古典小說

清水茂「水滸傳的地理知識」（パネル１１・中國古典小說Ⅰ）、李建中「從金瓶梅現象到賈寶玉情結」（パネル５８・中國古典小說Ⅱ）。

これらの部會を見て、感じたことを述べたい。

まず、道教方面の發表は、非常に盛會であったことが指摘される。例えば、中國古典小說のパネルなどでは、二つとも三名の發表者のうち一人しか現れなかった。逆にそのために李建中氏の發表などでは參加者が十數名であったこともあって、發表後の時間が完全に討論會と化し、活發な議論が展開する場となった。李氏の發表では『金瓶梅』と『紅樓夢』での主人公の性意識の差を指摘するものであったが、討論では、他の小說にまで對比が及び、中國文學全般を意識した論議となった。しかしこれは例外であろう。他の場ではかなり散漫に流れてしまったパネルも見た。

それに比して道教部會での發表には優れたものが多かったように思える。黃海德氏の發表は、四川地方に殘る石刻の道教像を紹介されたものであった。六朝から隋唐代の四川の石刻像はこれまであまり注意されていなかったので、非常に興味を覺えた。多くの貴重な寫眞を示されたのはありがたかったのであるが、スライドか、あるいは白黑でもコピーがあれば、もっと的確にイメージを捉えられていたかもしれない。

John Lagerwey（ジョン・ラガウェイ）氏の發表は、道壇を中

心とした道教の儀禮空間に關するものであった。同じく儀禮を研究される丸山宏氏との議論が白熱していた。その丸山氏の發表は、臺灣南部に殘される道教の百科全書『道藏祕要』の紹介とその意義に關するものであった。同書には、これまでの文獻に見られない記述が存在するとのことであった。

黃兆漢・鄭煒明兩氏の「香港の道教」では、兩氏の名が冠されていたが、實際の發表は鄭煒明氏によって行われた。この發表では香港の主要な廟や道觀の現狀が報告されたが、かなりの時間をかけた入念なものに感じられた。香港の道觀は歷史の新しいものが多く、しかも全眞教系のものが多いとの印象を抱いた。黃兆漢氏は他に「元代の武當道士張守清」では、武當全眞派の中心人物である張守清の系統が、清微派と全眞派の二派を共に繼ぐものであることを論じられた。筆者も明代の道教諸派について類似した考えを持っているため、多大な刺激を受けた發表であった。この他、卿希泰氏や鄭天星氏からは、道教研究の現狀についての報告があったが、新しい方向付けなどは見られなかったように思える。

なお、現地では會議の合間に多くの寺廟を見學することができた。灣仔付近では、天后廟・蓮花廟・黃大仙廟を見學した。その後、筑波大講師の丸山宏氏に香港中文大學の游子安氏を紹介いただき、その案内により抱道堂（北角）・青松觀支部（九龍北）・圓玄學院（新界）・青松觀（新界）などの道觀・道壇を訪問した。特に圓玄學院では、盂蘭盆の準備の様子を詳細に見せていただき、手厚い歡待を受けた。これらの場所では、香港において、宗教が人々の生活に密着している現實を目の當たりにすることができた。

また臺灣成功大學の丁煌先生とその指導學生のご好意により、西部のランタオ島の古廟の幾つかを見ることができた。參觀した廟は、寶蓮寺（鳳凰山）・關帝古廟（大澳）・楊侯大王廟（大澳）・洪聖大王廟（大澳）・華光大帝廟（大澳）などであった。島の狀況は中國の一般的な漁村の風景を思わせるもので、都會の廟とは異なる印象を受けた。また楊侯などの純然たる地域神が多いのが特色である。これらの廟の狀況からも多くの教唆を得た。

（二階堂）

二　發表について（二）
―敦煌學・中國宗教現象一般

會期中、筆者は、主として道教關係の部會を中心に、中國の宗教現象一般に關係する部會、および敦煌關係の部會を回

った。

はじめに、筆者が實際に聞くことのできた發表題目を記す。但し、道教關係の發表題目については前節で網羅されているので、そちらを參照されたい。道教關係を除くと、筆者の聞いた發表は、劉進寶（西北師範大學敦煌學研究所）「中國大陸敦煌學研究的歷史、現狀與特默」、張學榮（敦煌研究院）「凉州石窟及有關問題」、方廣錫（北京圖書館）「敦煌藏經洞封閉年代之我見——兼論〝敦煌文獻〟與〝藏經洞文獻〟之界定」（以上、パネル6）、Raymond A. Dragan（University of Tronto）. *The Flight of the Dragon; Theoretical Understanding in Classical China*［龍の飛翔——古代中國におけるその理論的解釋］、Raymond Prince（McGill University）, *Fox Spirits and Koro: Folklore and Illness on Hinan Island*（*South China*）［狐靈とコロ——海南島における民俗と疾患］（以上、パネル60）である。その內容を以下に記す。

「凉州石窟及有關問題」は、凉州石窟の歷史と調査結果に關する詳細な報告。凉州石窟の所在の特定、石窟の構造と文物をめぐり、詳しい說明が施された。特に、石窟の所在特定については檢討の過程が詳細に報告された。凉州石窟には樣樣な時代の石窟が混在しているが、歷史文獻の記述に現れた凉州石窟の描寫を檢討することによって、北凉王沮渠蒙遜が開鑿した石窟の所在を嚴密な意味での凉州石窟とし、それを種々の條件から武威天梯山の石窟に比定しうるというものである。文物については、特に一九五九年の石窟文物の移轉工事中に發見された北凉壁畫に見られる、東西の文化の交通と融合の形跡が重視されている。

「敦煌藏經洞封閉年代之我見——兼論〝敦煌文獻〟與〝藏經洞文獻〟之界定」は、敦煌の藏經洞の封鎖時期をめぐる論爭を詳細に檢討・批判し、更に近年の新發見資料に檢討を加えることで、發表者の觀默から回答を提示する。發表者は所謂敦煌文書の中に、元來莫高窟第一七窟には所藏されていなかったはずの文獻（例えば、S一一六〇六～一一六〇九には清朝・民國期の語彙が含まれている默などを例として）が混入している狀況を具體的に指摘し、藏經洞の封鎖時期を特定するには、「敦煌文獻」から、莫高窟第一七窟所藏の「藏經洞文獻」を辨別することが急務であると主張する。尙、發表者は、寫本を戰火から守るために莫高窟が封印されたとする「避難說」を隨所で批判しているが、そのため却って、中國大陸ではこの「避難說」が、いまだに隱然とした勢力を有し

ているかのような印象を得た。

「中國大陸敦煌學研究的歷史、現狀與特默」は、中國大陸における敦煌研究の歷史と課題を、ごく常識的な觀點からまとめて紹介したものである。

The Flight of the Dragon; Theoretical Understanding in Classical China は、漢代以前の中國における龍を構成する様々な要素を、羽と飛翔という要素を中心に、統合的・理論的に解釋しようという試み。發表者は、漢代の畫像石をもとに、漢代以前の龍觀における羽の重要性を取り上げる。シベリアのシャーマンに關する宗教學上の研究業績を演繹的に用いれば、この羽は、巫の飛翔を助ける聖獸としての龍の屬性を示唆するものと見られるのではないか、というのが發表者の提示した假說である。このような巫と龍との連關を假定すれば、『易』乾卦象傳に登場する龍や雩祭に使用される「土龍」など、様々な龍のイメージを結びつけて解釋することが可能になるとする。宗教學の業績の演繹の當否はともかく、畫像石上の龍の解釋に對する圖像學的注釋に乏しいように思われた。龍の圖像に關する專門家が部會の討論に參加していなかったのは、殘念なことである。發表後の討論は、盛況ではあったが、龍をめぐる一般的な表象論に流れてしまった。

Fox Spirits and Koro: Folklore and Illness on Hinan Island (South China), では、精神醫學を專門とする發表者が、海南島に見られる疾患であるコロ（生殖器の異常收縮をともなう一時的な生理的失調症候群）と、土地でその原因とされる狐の憑依現象の關係を例にとり、疾患に對する民俗的な說明が、その文化で生起する疾患の症狀を規定しうるか、という問題を論ずる。發表者は、全く異なる環境で見られる同一の症候群の例を示し、民俗文化に對應する生理的失調の存在を想定する culture bound syndromes の概念を批判した。これは精神醫學と民俗學の接點の問題で、興味深いテーマに關わっていると思われたが、やはり海南島の狐靈信仰の實際に詳しい對論者がいないので、充分意味のある討論に發展しなかったのが殘念である。部會參加者からは、海南島の民俗宗教の詳細についての質問が集中したが、當然のことながら、醫學者である發表者は間接的にしか答えられない場合が多かった。これは、發表者自身の問題というよりも、部會の組織運營上の失敗に歸されるべき問題というべきであろう。

以上が、筆者の參觀し得た、道教以外の諸分野に關する發表の概觀である。全體の部會の多さに比べれば、もとより極

めて限られた範圍についての報告にすぎず、會議全體の空氣を傳えられないことを遺憾に思う。ただ、自ら見聞した範圍で述べるなら、概して敦煌學や道教研究の部會のような、專門的な色分けが判然としている部門では、議論も比較的活發で、專門家同士の實りある討論が行われたように思う。それに對し、間領域的な部門では、發表者の專門的な見解を相對化して、參觀者の議論を促すような對論者が設定されていなかったため、虚しい議論に時間が費やされた例もあったのである。

ただ、對論者のいない狀況では、たとえ專門的部會であっても、發表者が自らの專門的な見解をある程度相對化する努力をしなくてはならないという點は、今回折に觸れ感じたところである。例えば、道教關係の部會で、Knut Walf (Nijmegen, Holland), *Working On A Western Bibliography of Taoist literature —Experiences and Results* [道教文獻に關する欧州語參考文獻目錄を作成して] は、ドイツ語を中心とする欧米諸語で著された歷代の道教文獻の翻譯・研究書・文學一般における道教理解の問題點を指摘したが、その際、何度かK・シペール氏のコメントを引用して、發表者自身の見解を相對化した。そのため、發表者の立場がかなり明らかになったといえよう。それに對して、前節で擧げられた黃海德氏の發表は、そこで示された寫眞資料や調査報告が極めて貴重なものを含むことは、先に述べられたとおりであるが、黃氏の調査した地域のうち、四川省内の調査地は、氏の師事した王家祐氏による「四川省道教摩崖造像」(王家祐『道教論稿』一九八六年) の調査地とかなり重なるのである。しかし、王氏の研究業績への言及がなされなかったため、發表者の立場がやや曖昧に見えた點などは、指摘しておいてもよいかもしれない。

いずれにせよ、自分と專門を同じくする東西の新進の研究者の存在を知り、あるいは直接話をする機會を得、また、饒宗頤博士のような碩學に間近に接し得たのは、私個人にとっての本會議における最大の成果であった。そして、語學の勉强をはじめとして、大きな課題が目の前に積まれていることに焦った氣持ちも忘れないようにしたい。

その他、會場のほか、前述(前節)の丁先生、丸山先生、遊先生に御案内頂いて、諸道觀・廟・道壇を訪れる機會を得たことは、まことに幸いであった。また、會期中、たまたま前述の圓玄學院で盂蘭盆會の醮がとりおこなわれ、筆者はそれをも實見する機會を得、多くの考えるべき課題を與えられ

た。なお、現地の道觀・道壇の見學を、我々の香港入りに先だって手配をして下さったのは、かの地で扶乩信仰を專門に研究しておられる筑波大學の志賀市子女史である。

（森）

三　發表について(三)—南アジア・佛教

發表數だけで言えば、七五パネルを準備した南アジア部門も、一七パネルを豫定していた佛教研究部門も、あたかも兩分野の世界的な盛況を呈するかに見えたが、實際、學問の進歩に貢獻し得る研究が少なく、新しい文獻の發見或いは新たな見解を述べる發表よりも、むしろ從來の學說や情報を單に繰り返すものが多かったように思われた。尙、今回の會議にインドや欧米の碩學は殆ど出席せず、中堅學者の參加數も少なかったことに加えて、かなりの部會では、發表者の主題が懸け離れ、相互の關連性に乏しく、同じインド學や佛教研究とはいえ、積極的な意見交換が妨げられた。更に、發表者の突然の欽席や發表主題の變更など、組織面での數多くの問題も全體の雰圍氣を害なった感がある。しかし、その一方では、注目に値すべき勝れた研究發表もあり、また實質的な所見の交換が成り立った場面もみられた。又、初期佛教の研究でも知られている、ローザンヌ大學の J. Bronkhorst 教授が立案し、中心となって細かな準備を行なった「ヴァイシェーシカ」の部會のように組織面でも成功を收めた部會もあった。これには日本や欧米の十三の學者が參加し、五部會に於いてヴァイシェーシカの思想や歷史について研究發表を行い、學問上でも勝れた成績を擧げたようである。筆者がこの部會には出席できず、詳しく報告できないのは、實に殘念である。以下、筆者の見聞した主な發表を簡單に紹介したい。

（一）Fumimasa FUKUI 福井文雅（早大），*Praises of incense, "xiangzan" 香讚, of Chinese Buddhism: Ritual Differentia between China and Japan* は、中國佛教に於ける「香讚」の起源と展開を究明した貴重な研究發表。近世から現代にかけて中國佛教の儀禮に廣く用いられているこの「香讚」は、今まで延壽（九〇四—九七五）の作とされてきたが、福井教授の綿密な考證によると、現存文は明代（一五—一六世紀）のものと判明する。尙、文體上では、「香讚」は、「掛金索」という詞牌に由來していることも明らかにされ、普段無視されがちの宋代以降の中國佛教に關する新しい研究課題が次々と提供された。

（二）TAKASAKI Jikido 高崎直道（早大），*Formation*

of the East Asian Buddhist Sphere は、漢譯佛經を聖典としてきた東アジア佛教圏の形成と展開の概觀。これは中國文化圏とも重なり、そのもとに成長した日本や朝鮮、ベトナム等で榮えた佛教は、インド佛教圏とチベット佛教圏とは異なった佛教の特徴を呈していることが指摘された。

（三） SUEKI Fumihiro 末木文美士（東大）, *The Influence of the "Lotus Sūtra" upon Japanese Culture* は、『法華經』をめぐる中國佛教、特に天台宗の解釋と比較しながら、日本佛教、主として平安時代に於ける『法華經』の受容を論じた。

（四） Koichi HIGUCHI 樋口康一（愛媛大）, *Mongolian Versions of the "Saddharmapuṇḍarīka" or『法華経』from the Linguistic and Philological Viewpoint* は、詳しい文獻學的考證を基に、今まで殆ど注目されなかった『法華經』の蒙古語の五種の譯本にみえる中期モンゴル語（Middle Mongolian）の特徴を見出した綿密な研究。

（五） Hidenari NISHIO 西尾秀生（近畿大）, *H.S. Olcott and Buddhism* は、神智教會創始者の一人、オルコット（一八三二―一九〇七）の近代日本佛教に於ける役割を論じた、興味深い發表。一八八九年及び一八九一年、二回にわたって日本を訪れたオルコットは、佛教の思想が如何に勝れているかを訴え、脱亞入歐の只中で次第に佛教から離れつつあった日本人の佛教再評價、キリスト教勢力の伸張阻止に與って力あった。また、南傳佛教と北傳佛教の統一を試みた人物でもある。

（六） Tsugunari KUBO 久保繼成（國際佛教學研究所）, *The Lotus Sūtra as a Text that Challenges the Traditional Concept of "Nirvāṇa" within Buddhism* は、『法華經』に於ける佛教の傳統的な涅槃觀に對する批判を考察した發表。

（七） MARUYAMA Takao 丸山孝雄（信州大）, Buddha's Supernatural Powers in the Lotus Sutra は、『法華經』に於ける神通の種類と役割の檢討。

（八） Akira YUYAMA 湯山明（國際佛教學研究所）, *Remarks on Li-yen's "Fan-yü tsa-ming": A Sino-Sanskrit Dictionary Composed in T'ang China* は、唐代の漢梵辭典である、禮言の『梵語雜名』に關する詳しい文獻學的研究。

（九） SATO Michio 佐藤道郎（岩手大）, *The Real Image of Dol po pa* は、*gshan-ston*（*paraśūnyatā*）說を

唱えたチベットの修行者 Dol po pa (1292–1361) の思想を論究した發表。

(一〇) Shingo EINOO 永ノ尾信悟 (東大), *The nāga-pañcami as Described in the "Purāṇas" and Its Treatment in the "Dharmanibandhas"* は、プラーナ文獻にみられる蛇崇拜の儀式に關する詳細な考察。

(一一) V.C. SRIVASTAVA (Banaras Hindu大), *Bodhisattva-Cult in Afghanistan: A Critical View* は、アフガニスタンに於ける主な佛像、卽ち、釋迦、彌勒と執金鋼神 (Vajrapāṇi) をめぐる報告並びに彌勒信仰の形成を論じた發表。Srivastava 教授によれば、中央アジアから西アジアにかけて廣く信仰されていたミトラ教の救世神の理想、そして佛教內部の大衆部及び大乘佛教の菩薩思想の伸長により危機に直面していた保守的な小乘部派、特に說一切有部が彌勒を揭げ對抗しようとしたことが彌勒信仰の起源であるという。社會的に不安定な時代を生きていた民衆もやがて彌勒菩薩を受け入れ、諸々の要素を取り入れたうえ、これを强く支持するに至った。考古學的證據に基づき、樣々な資料を檢討した研究發表で、確かに注目すべき點が多いが、パーリ經典に既に登場している彌勒菩薩に對する信仰の起源については、中央アジアだけに限定せず、幅廣く佛教文獻やインド全土の狀況を視野に入れたなら、より有力な說を立てられたのではないかという感がある。

(一二) K. BHATTACHARYA (Centre National de la Recherche Scientifique, Paris), *Back to Nāgārjuna and Grammar* は、龍樹の『中論』第二章に於ける運動の否定と Patañjali の Mahābhāṣya という文法學の書との論法的關係を考察した貴重な研究發表。

(一三) T.R. SHARMA (Delhi大), *A New Interpretation of Śūnyatā According to the Ratnagotravibhāga of Maitreya* は、『寶性論』に於ける空性に對する常樂我淨の理解を述べた發表であるが、それを佛教全體の空說の究極の意味と見做す點は受け入れ難く、インド人のアートマン說への思い込みによる擴大解釋としか思えない。

(一四) Sushma SINGHVI (Kota Open 大), *Dharmakīrti, the Follower of the External Objects Existence* は、法稱が唯識說或いは中觀說に從わず、外境の存在を認めた思想家 (bāhyārtha-astitva vādin) であることを論じたが、それは學界において既に唱えられている學說であり、今までの歐米や日本の研究を充分踏まえなかった發表であっ

た。

（一五）M.I. KHAN (Delhi 大), *Philosophy and Mysticism of the Vedic Fire* は、ヴェーダを中心にアグニの諸意味を検討した發表。

ところで、インド人研究者に關して云えば、Srivastava や Bhattacharya のように客觀的なデータに即して新しい說を試みる學者もいたが、學界の定說を單に繰り返し、或いは資料を恣意的に使って自らの思想に到達しようとする人もいた。特に後者の傾向は、非常に高度な哲學を生み出したインド人の究極の眞理への憧憬の表れとはいえ、現代學問の方法や目標とはかなり異なっている。例えば、會議中、インド人學者が發表者に對して、歷史的事實とは別に、ある概念や思想の是非について自分の意見を述べるよう質問した場面もあり、筆者の發表(Florin DELEANU, Mahāyanist Elements in Chinese Translations of Śrāvakayānist "Yogācārabhūmi" Texts) の後、あるインド人研究者が、瑜伽行者の思想と聖書の世界がどのように結び付けられるかと問いかける場面もあった。

（一六）Ming-Wood LIU 廖明活(香港大), *The Sudden-Gradual Distinction in Chinese "P'an-chiao" Thought* は、たいへん綿密な研究發表で、慧觀や劉虬、菩提流支、眞諦、慧光、淨影寺慧遠、智顗、法藏等を中心に判教思想に於ける漸教・頓教の區別を分析した。中國佛教の研究者にとって、漸教・頓教はよく知られている語であるが、その具體的な意味や使い方の違いが看過されがちである。この點、LIU 教授の研究は嚴密にそれぞれの思想に於ける漸教・頓教の意味や特徵を把握し、位置付けることに成功している。しかし、教理上の位置だけではなく、歷史的な背景や變遷も檢討されたなら、より說得力ある研究になったであろうという印象が多少殘った。

（一七）Alexander MAYER (Heidelberg 大), *The Dreams and the Death of the Translator Xuanzang—Revisiting Arthur F. Wright's "Biography and Hagiography"* は、著名な故アーサー・ライトの玄奘傳記の研究方法を批判しながら、佛教の聖傳研究に對する新しい見解を提唱した、非常に興味深い發表。一九四五年の玄奘傳研究の中で、ライトは歷史的事實傳 (biography) と、果報や神通、夢中または禪定中での菩薩との出合い等のような「宗教的フィクション」とされている聖傳 (hagiography) とを嚴密に區別する研究方法を用いたが、これに對して Mayer 教

授は、リクールやフーコー等の手法を意識しながら、「作業テクスト」(work-text)、「傳記テクスト」(biographical text)及び「人生テクスト」(life-text)という三角モデルを導入した。これによると、玄奘の眞なる求道者としての生き方とそれに伴う様々な心理的體驗等を單にフィクションとして傳記から排除することなく、しかも、それを描いた傳記作者が歴史を僞造する作意を前提とし、我々の日常生活のみを決して絶對的な基準としない、――このような態度のもとで、上記の三種の「テクスト」の複雜な入り組みの究明を通してその全體像を再建すべきである、という。これにはまだ完成された研究モデルとは云い難い部分もあるが、今後恐らく大きな課題になるであろうと思われる佛教文獻のテクスト分類や研究方法の再檢討の一つの試みとして大いに評價し得るものである。

（一八）Edwin D. FLOYD (Pittsburgh 大), *Archaism in Mārkaṇḍeya's Discourse* (*Mahābhārata* 3.181-283) は、『マハーバーラタ』第三篇後半所收のマールカンデーヤ仙の語る說話の中に幾つかの非常に古いインド＝ヨーロッパのモチーフが存在していることを論證した。そのひとつに、業 (karma) 說が擧げられていたことは興味深い。

他の研究發表も見聞したが、特筆すべきものがなく、割愛させていただく。國際會議に參加することの意味は、情報を得るよりも（それだけなら、書齋に引き籠もったほうが善かろう）、意見の交換や學問のいわば〝時代精神〟(Zeitgeist) に接することにこそある。その點でも、今回のＩＣＡＮＡＳに參加する意義は充分あったと云えよう。

（デレアヌ）

おわりに

今回のＩＣＡＮＡＳ香港開催について私達にお教え下さり、また見學するように勸めて下さったのは早稻田大学の福井文雅先生であった。著作にしか接したことのなかった先生方にお會いする機會に惠まれたことや、國際會議での研究發表が、國内のそれに比して異なったものであることを認識させられ、多くのことを學ぶことができた。また様々な意味で、我々二・三十代の若輩にとっては刺激的な經驗であった。ここにあらためてこのような機會を私達に與えて下さった福井先生に、心より感謝の辭を申し上げます。